

『煤煙』の序

夏目漱石

青空文庫

「煤煙ばいえん」が朝日新聞に出て有名になつてから後間のちもなくの話であるが、著者は夫それを単行本として再び世間に公けにする計画をした。書肆しよしも無論賛成で既に印刷に回して活字に組み込まうと迄までした位である。所が其頃そのころ内閣が變つて、著書の検閲が急に八釜敷やかましくなつたので、書肆は万一おもんばかを慮つて、直接に警保局長の意見を確めに行つた。すると警保局長は全然出版に反対の意を仄めかした。もし押切つて発売に至る迄の手續をしやうものなら、必ず発売禁止になるものと解釈して、書肆は引下つた。著者は己やむを得ず煤煙の切拔帳いだいを抱いて、大に詰おほいつまらながつてゐた。

所へある氣の利きいた男が出て来て、煤煙の全部を出版しやうとすればこそ災を招く恐れがあるので、そのうちの安全な部分だけ丈を切り離して小冊子に纏まとめたらどんなものだらうといふ新案を提出した。著者は多少思考を費した上、此説このに同意して、直に煤煙たゞちの前半、即ち要吉が郷里きやうりに歸つて東京に出て来る迄の間を取敢とりあへず第一巻として活版にする事に決心した。

著者の選択した部分は、煤煙の骨子でない所から云へば、著者に取つて遺憾かも知れないが、安全と云ふ点から見れば是程これほど安全な章はない。誰が讀んだつて差支さしかへないんだ

から大丈夫である。其^{その}上余^{うへ}の視^みる所では、肝心の後編より却^{かへつ}て出来が好い様に思はれる。余は煤煙全部を読み直す暇がないので、判^{はつきり}然^しした判断を下すに躊躇するが、当時の新聞は連続して欠かさず眼を通したものだから、未^{いま}だに残つてゐる、其^{その}時^{とき}の印象は、恐らく余に取つて慥^{たし}かなものだらうと考へる。其^{その}印象を平たく他^{ひと}に伝へ得る様な言葉に引き延ばして見ると斯^かうである。――煤煙の後篇はどうもケレンが多くつて不可^{いけ}ない。非常に痛切なことを道楽半人に見せる為に書いてゐる様な気がする。所が前半には其^{その}弊^{へい}が大^{だい}分^{ぶん}少い。一種の空氣がずつと貫いて陰鬱な色が万^{まん}遍^{べん}なく自然^{じねん}に出てゐる。此^{この}意味に於^{おい}て著者が前篇^{だけ}丈を世に公けにするのは余の賛成する所である。

此^{この}前篇の特色として、読者に注意したいのは、事件の充実と云ふ事である。それを少し布衍して云ふと、事件が走馬燈の如^{ごと}くに出てくると云ふ意味である。もう一つ外^{ほか}の言葉で説明すると、事件が発展的に叙せられないで、読者を圧迫する程ひし／＼と並んで寄せ掛るのである。恰^{あた}も金^かを接^つぎ合せた様に寸分の隙間なく寄せてくる。従つて読者は息が繼^つげない。事件に引き付けられて息が繼^つげないと云つても嘘ではないが、実を云ふと、寧^{むし}ろ苦しくつて息を繼^つぐ余裕を著書から与へられないのである。此^{この}状態は半^{なか}ば事件^{そのもの}其^{その}物^{もの}の性質から出る事^{こと}も序^{ついで}に注意したい。煤煙の主人公が郷^{きやう}里^りへ歸つてから又東京へ引き返す迄に、

遭遇したり回想したりする事件は、決して尋常のものではない。悉く飛び離れて強烈な色采きさいを有してゐるもの許ばかりである。要吉は犬の耳を塩漬しほつけにしてゐる女の夢を見たと言いてある。主人公は一場ぢやうの夢に至る迄、何か天下を驚かす様な内容でなければ気が済まないのだとしか解釈出来ない。

夫それだから読者の受ける感じの中には、著者が非常に苦心したたと云ふ自覚が起ると同時に、それが自分の額に反映して読む事が既に苦しくなる場合もある。又事件があまり派出はでに並んでゐるために、（其調子は厭いやに陰鬱ではあるけれども）殆んどセンチシヨナルな安っぽい小説と脊中合せをしてゐる様な氣も起る。

事件が是程これほど充実してゐる割に性格が出てゐないのが不思議である。著者はあれ程性格が書いてあれば沢山ぢやないかと云ふかも知れないが、余の云ふ性格は要吉の特色を指すのである。篇中に書いてあるのは要吉の境遇である。是は濃く出てゐる。けれども其割そのわりから云ふと要吉は薄っぽいものである。何故なぜと云へば、要吉の言動が、かゝる境遇の下に置かれたる普通の人のなすべき言動以外には一步も出てゐないからである。要吉でなくつても、誰を捉とらへて来ても、斯かう云ふ境遇の下に置いたら、矢つ張り要吉の通りに働くだらうと思はれるからである。従つて是は要吉であつて、明吉めいきちでも太吉たきちでも半吉はんきちでもない

といふ特殊の性格を与へてゐない。余は要吉の言動を読んで要吉と共に陰鬱にはなる、けれども成程なるほど要吉とはこんな種類の人間であると、著者から教へられた事がない。性格を上手にかく人は、これ程ほどはげ烈しい事件の下に主人公を置かないでも、淡々たる尋常の些事さじのうちそのひとに動かすべからざる其人の特色を發揮し得るものである。

以上は余が煤煙の前篇を読み直して得た感想である。其その当否はいざ知らずとして、此書このを読む人の参考になん少なりはすまいかと思つて序文とした。其裏面に追隨する長所に至つては、読者の一見してすぐ氣の付く事のみだからわざと略した。

青空文庫情報

底本：「漱石全集 第十六卷」岩波書店

1995（平成7）年4月19日発行

初出：「東京朝日新聞 文芸欄」

1909（明治42）年11月25日

※本稿は初出ののち、森田草平「煤烟 第一巻」金葉堂・如山堂、1910（明治43）年2月15日の序文として採録された。

※底本のテキストは、初出による。

※底本には、初出のルビを「適宜削除した。」旨の記述がある。

入力：砂場清隆

校正：小林繁雄

2003年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

『煤煙』の序

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>